【学力向上フロンティアスクール中間報告書】

都道府県名　山形県

Ⅰ　学校の概要

（平成 16 年１月現在）

学校名	鶴岡市立大山小学校								
学年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊	計	教員数
学級数	２	３	２	２	２	３	１	１５	２０
児童数	５７	７３	６２	６６	６５	８４	４	４１１	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「わかる」よろこびを感じることのできる子の育成
～算数科における個に応じた指導の工夫～

２．研究内容と方法

（１）実施学年・教科

実施学年及び教科
１年・国語　算数
２年以上・算数
　本校で３年前より取り組んでいるコース別学習をより効果的に行い、学力の向上を目指すため。

（２）年次ごとの計画

平成15年度	○テーマ 　単元の特性や児童の実態に応じた学習形態・評価のあり方をさぐる ○研究の見通し（仮説） 　学習内容や児童の実態に応じた学習の形態や方法を工夫することで、個に応じた指導が可能になり、学習の形態や向上につながると考える。 　学習内容を理解できることで、児童の学習意欲の向上につながると考える。 ○研究の内容・方法 　①単元の特性や児童の実態を考慮した単元計画の作成 　単元の特性や児童の実態を考慮した上で、指導形態を決定していく。この単元計画を、担任を中心として、学年担当教諭と作成し、実践後、おこなってみての感想や指導の実際の様子を記入し、今後の参考としていく。 　②効果的な指導方法の集約 　個に応じた指導として、特に効果的だった指導法や教材の活用など、学年、単元にわけて、記録し、児童の実態と合わせて集約し、今後の参考にしていく。 　学習プリント、プレテストなどの蓄積をおこなっていく。 　③評価

	・ 各単元における児童の実態把握をしっかり行い評価にいかしていく。実態把握には、個人カードなどを有効に活用する。 ・ 学期末に児童の実態調査（アンケート）と、学期末テストの結果などを集計し統計をとっていく。学力テストの結果も含めて継続して評価していく。 ・ よりよい評価のあり方について評価評定委員会と連絡を取り合い検証していく。 ・ 評価の結果を児童の意欲につなげていく。

平成16年度	○テーマ 単元の特性や児童の実態に応じた学習形態・評価のあり方をさぐる ○研究の見通し（仮説） 学習内容や児童の実態に応じた学習の形態や方法を工夫することで、個に応じた指導が可能になり、学習の形態や向上につながると考える。 学習内容を理解できることで、児童の学習意欲の向上につながると考える ○研究の内容・方法 平成15年度の実践記録を活用し、見直しを図りながら、よりよい学習形態の実践と効果的な評価のありかたを検証していく。

（３）研究推進体制

フロンティアティーチャーを中心に推進部会を行い、全体研修で方向性を確認し実践する。具体的内容については各学年で検討する。

実践記録用のファイルを各学年ごとに用意し、指導計画、使用したプリントなどを保存し、次年度に引き継ぐ。

各学年における、指導体制は下記のようになる。

	１年	２年	３年	４年	５年	６年
学級数	2	3	2	2	2	3
指導者数	3	4	3	4	3	4

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．　研究の成果

○コース別学習に取り組んで３年目になるが、大山小スタイルを明確にすることができた。特に、習熟度に限らず多様なコース設定ができたことで指導に広がりを持つことができた。

○平成１４年度４月から１２月までの総欠席数８８８、平成１５年度の同時期は７７１と大きく減少している。

○コース別に対する児童の心理的な抵抗もなく、「楽しい」「わかる」といった意欲面の向上がみられる。

○担任団だけでなく級外の複数の教師がコース別学習に加わることにより、児童理解が深まり、算数の学習以外でも日常的な関わりが増えている。このことが、児童の心の安定につながっていると思う。

○これまでの習熟度別だけのコース別学習に比べ打ち合わせや教材研究の時間が非常に重要になっている。実際に授業を行う中で、児童の様子を見ながら指導方法や学習形態など学年で検討することができ、児童に返すことができたのは非常によかった。
○学習の意欲や学力面での目に見える子どもたちの変容から保護者の関心・理解が高まってきている。

２．　今後の課題

●各学年にファイルを用意し、指導法の集約を行ってきた。単元計画や、各コースで有効だった手だて、学習プリントや評価のカードなどをつづっている。このファイルを次年度に引き継ぎ研究の積み上げを図る。
●庄内教育事務所指導主事ご指導いただいたが、評価の基準性をより明確にしていきたい。今年度はなかなか評価項目まで厳選できなかった。ただ、成果の方にもあるように、学年で単元の途中で形成評価を行いながら進めることができたことをより有効に活用していきたい。
●コースによる学習内容の精選が必要になる。下位児童はどうしても計算方法の習得が中心になるが、思考力を養う問題にどのように取り組ませ力を付けていくか指導の工夫が必要となる。
●上位児童に発展問題や思考力を必要とする問題にどのように取り組ませていくかなど検討していかなければならない。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取り組み

全校で学力テストに取り組み、追跡調査を行っている。また、今年度は、学力テストの結果から、評定の各段階の児童を学年２名程度抽出し、「数と計算」の領域における、ワークテストの結果を記録し、コース別学習においての変容を確認している。学期末にアンケートをとり、児童の意識調査を行い、指導に生かしていく。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

平成１５年度鶴岡市夏季集中講座「少人数指導」事例発表会において、本校の取り組みを発表。
鶴岡市実践事例集、山形教育に、本校の取り組みを掲載。また、フロンティア指定校の公開研究会においても取り組みを発表する。
平成１６年度公開研究会を予定（期日は未定）

【新規校・継続校】　平成１５年度からの新規校
【学校規模】　１３～１５学級
【指導体制】　少人数指導　Ｔ・Ｔによる指導
【研究教科】　算数
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　有